

## 凡例

- 一、本書は、東京都江戸東京博物館が所蔵する米屋田中家文書の「日記 明治九く十五年を翻刻したものである。翻刻に際しては、同館所蔵 マイクロフィルムを使用した。
  - 一、翻刻に際しては原文書の様式を残すように努めたが、読みやすさなどを考慮して次のようにした。
    - 1 本文は一つ書ごとに追い込みとし、文中に適宜、読点「、」並列点「・」を付した。
    - 2 漢字の旧字体・異体字・俗字は原則として常用漢字としたが、常用漢字にないものは正字を用いた。  
但し、一部の漢字は「躰」「杯」「惣」に限り原文書のまま用いた。
    - 3 当て字・誤字はそのまま表記し、正しい文字がわかる場合は(何)正誤不明の場合は(ママ)あるいは(何カ)と傍記した。また脱字がある場合も同様に(何脱)、(何脱カ)、明らかに余計な文字は(衍字)と傍記した。  
なお、以下の当て字は原文書のままとし、傍記も略した。  
義||儀、丁||町、懸||掛、家||屋(家根、家上)、至||到(至来・至着)、欠||駆(欠付)、膳||繕(営膳)
    - 4 片仮名はそのままとし、変体仮名は平仮名に改めた。  
但し、而・者・江・茂・与はそのままとし、文字ポイントを下げ、右寄せした。
- 5 合字は平仮名に改めた。  
(例) ㇿ ↓ より
  - 6 解読不能の文字は、字数分の□、字数不明のときは「」とした。踊り字については、漢字は「々」、平仮名は「々」、片仮名は「々」を用い、大返しは「く」を用いた。
  - 8 ㇿは「合計」の意の場合のみそのままとし、「締」「貫」「注連」の意の場合はそれぞれの漢字で表記した。
  - 9 原則として台頭は三字空け、平出は二字空け、闕字は一字空けとした。
  - 10 印章は実際に押印されているものは(印)と表記し、文字で印と記されている場合はそのまま 印 と表記した。
  - 11 ( ) のないルビなどは原文書に振られたものである。
  - 12 紙荷物の単位として丸・団が頻出するが、翻刻にあたっては基本的に原字のままとした。そのために両字が混在している箇所もあるが、原記述を尊重して編集を施さなかった。
  - 13 人名で同一人にもかかわらず「治助」と「次助」、「勝蔵」と「勝三」「勝造」などの混用が見られる場合もあるが、統一せず、原文書の表記通りとした。  
但し、他史料などで確認できるものは傍注を付した。
  - 14 敬称は原則原文書のままとした。但し、元藩主、及び書き手にとつて主従関係の明瞭な田中家の人物などに欠落があったときには、適宜補足の傍記をした。

15 挟込文書は罫線で囲んで範囲を示し、「挟込文書」と注記を付した。

16 抹消は当該文字に二重線を施し、訂正記事がある場合には右傍に示した。

一、翻刻文中には、現在の人権意識からみて不適切と思われる表現も使用されているが、資料文献であるため原文を尊重し、そのまま翻刻した。正しい理解と認識のもとに利用されることを願うものである。

一、本稿の編集は東京都江戸東京博物館都市歴史研究室の田中実穂が担当した。翻刻にあたっては以下の諸氏の協力を得た。記して感謝したい。

江戸東京博物館友の会

大野晴美 岡橋園子 川端範子 小山治夫 齊藤紀子 佐藤壽昭  
島 恵子 高田啓右 高橋 知 津嶋靖弘 中屋信次 本庄文江  
三神千種 宮本慶子 牟田俊子

(令和五年一月)